

まえがき

本報告書は、2007年12月に防衛研究所が主催した第10回安全保障国際シンポジウムの成果である。「北朝鮮の核問題―平和と安定に向けて―」と題するシンポジウムには、国内外の専門家が招聘され、2日間にわたって討論が行われた。発表者は、米国、韓国、中国、ロシア、日本それぞれの立場から、六者会合を中心とするこれまでの解決プロセスの可能性と限界を明らかにすることを通して、関係各国の北東アジア戦略に関して複合的な視点を提供した。

北朝鮮の核問題は大きな節目の時を迎えている。北朝鮮の核施設の無能力化は順調に実施されるのか。核問題解決のプロセスにおいて、米朝関係、南北関係、日朝関係、対北朝鮮エネルギー支援など、論議すべき課題は多い。六者会合の参加国がこれらの課題に関して一致点を見出すことができるのかは予断を許さない。もし米国、韓国、中国、ロシア、日本がそれぞれの利害に基づいて北朝鮮に対する支援、抑止等の政策を進めるとき、はたして核問題は解決されるのだろうか。

いま一度、北朝鮮の核問題解決のプロセスが平和と安定の方向に進んでいるのかどうかを検討する必要がある。北朝鮮の核問題は、短期的な軍事・安全保障上の問題であると同時に、北東アジアの国際関係の構造に関わる長期的な問題でもある。このような問題意識に基づき開催された本シンポジウムは、多くの参加者を得ることができ、発表された論文を報告書にまとめる運びとなった。ここに、シンポジウムを成功に導いた6名の海外からの専門家及びコメンテーターの森本敏教授にお礼申し上げる。

本報告書が北朝鮮核問題解決の方策、さらには北東アジアの平和と安定のための望ましい枠組みを模索するための議論を活発化させる機会となり、また国民の皆様にとっても安全保障問題に対する関心と理解を深める一助となれば幸いである。

武貞秀士
防衛研究所統括研究官